



下巻全

奥義抄下之下

問答

一ひりや

三神國

五二四八等

七ひらひ

九小車のりまき

三十一せりゆく

三十さく

二ひらひ

四さくばみ

六さくとし草木の葉

八ひらひ

十ゆゑ

二十二ひりま

二十四ひらひ

五十の神

六十カノヤ 純神樂

トサハ駕サカ車カミ

六十ノリハカミま

誄タマ詣タマ奇

十二譬タマ喻タマ奇

長歌短奇

二九反歌

三九一七九

旋頭奇

四九混本譜

一問云 古事記かしらやうとあらはれ事  
答云 りやうの事よりは萬をもとてどうぞ也  
何よりは江主よはと云物とぞくより  
日昇ひとりありそき角カツカすくの事とぞ  
活生ととどりとぞくられわくものよはせ  
うとあくやうとぞく鳥トリとゆめきに萬  
の事カツカすくとぞくいのうよく而とぞ  
里トリとしてえりとぞくとぞくとぞくとぞく  
せえものうがうりとぞくとぞくとぞくとぞく  
つりとぞくとぞくとぞくとぞくとぞくとぞく

子りと少物となりてうちまきを 一方集

集

約のまゝかひやうもくすけりの  
却つてよきとしりしめや

曰ふ河を斬とどもも春のすとまくあつてお  
氣とそりまえれも冬とすとまくよもも  
春云されは冬とまくのをとほりとせらる  
ひやへうらとうねうわの春とまくても  
うん約とまくとよひ暮とよみうらの年  
まくひのうらとよひ暮とよみうらの年  
もあり又万葉集とひうらとよひもつりと

うすらひ

あまうらのよひ暮とよみうらとよ

うのうりくうううううううう

又云

秋乃田北りうらとよみうらと  
うううううううううう

又人也并云

まくよひうらとよみうらとよ

王陳ち御と并よひうらとよみうら

おもとのみつはまわつも  
しやうとくとくとくとくとく

うきはるのうき

二問云ひうち草むとあらゆるよひうめ  
物神のまことの自けうめくあまゆうせ  
の男れあまことの草まことあまゆうせ  
神の御前まことのうめくあまゆうせ  
へまことあまゆうせのうめくあまゆうせ  
ておまことあまゆうせの男れあまこと  
あまゆうせ神の御前まことあまゆうせ

おまゆうせをととてゆくわらひのて  
おまゆうせをととてゆくわらひのて

あまゆうせをととてゆくわらひのて

牛事まことのうめくあまゆうせ  
としゆうづか  
答云或人方  
見ハひくとひくとひくとひくと  
ひくとひくとひくとひくとひくと  
ひくとひくとひくとひくとひくと  
ひくとひくとひくとひくとひくと



日中記云書

天皇廿年三月朔天照大神 豊稚姫命  
謝て倭姫命は御引立と倭姫命本命と  
あらわせしと有りとすも巻田の藤檣は  
翁よりてく近ひある入東迦義濃  
翁の國よしと時天照大神倭姫命よ  
つゝのまゝこれ神風伊勢國それから帝  
世の後重良帰國へ御圓乃蔭圓く甚不  
居とせむる太神のそへどすとすと  
翁の國よしと時天照大神とすと御河の  
よす興、フモと翁の心とすとすりて、天照  
大神りやまくひのきとすとすりて、天照  
是もひやまくひのきとすとすりて、天照  
翁ハありのゑく  
四問云所とすとすと云半ギ又以よ  
答云日中記云天智天皇御立の事に於  
リ御守御事と達立の事に於て勝

地とす。かくよ六年二月の夜、  
御門奏云つぬれど靈巖ありもとて詔  
書。帝は御内へとて御内へとて詔書をす  
せりきゆうひゆうの御内へとて詔書をす  
人處づりまくすゆはくの御内へとて詔書  
ひゆのよあくせくすよ小山并小流水也  
又御婆塞ありと經行念诵とゆへととよ  
えんとその様行とるよと奇異者とゆひ  
ゆ。帝とのと経行章優政安塞つてしま  
す。御内へとて詔書をす。奏云仙靈巖  
伏龍地府へとて實長等沙とゆく。せぬ  
伽藍とてとうへとて素綱寺是之とて  
そりやくうりとゆく。みくらくひく  
の山りりとゆく。ゆくとゆくとゆく方深  
ゆくわゆくやひく。夙内へとゆく  
御内へとゆく。わゆの神うれうる  
とゆく。又ぢくはとゆく。とゆく。とゆく  
立。向云古奇よ三四八とあるい。事本  
卷云二四八事本とゆく。或ハ西紀道也

主としのひよしと云ふと三四八ハシテ珍り  
主としのゆくち鶴<sup>ホク</sup>をハシテのゆと云や思  
鶴<sup>ホク</sup>を都<sup>ミチ</sup>トヤ思<sup>スル</sup>アヘト曉<sup>アサヒ</sup>ト  
モリの鳥<sup>トリ</sup>をも<sup>シ</sup>ハシテのゆと云<sup>スル</sup>ア  
思<sup>スル</sup>トヤ思<sup>スル</sup>主としの鶴<sup>ホク</sup>を福<sup>ラカ</sup>  
アシテのゆと云<sup>スル</sup>アシテのゆと云<sup>スル</sup>三四八  
アシテハと云<sup>スル</sup>アシテのゆと云<sup>スル</sup>アシテ  
アシテも<sup>シ</sup>三四八アシテアシテのゆと云<sup>スル</sup>アシテ  
阿<sup>ア</sup>の<sup>シ</sup>アシテのゆと云<sup>スル</sup>アシテのゆと云<sup>スル</sup>アシテ

アシテのゆと云<sup>スル</sup>アシテのゆと云<sup>スル</sup>アシテ

主としのゆと云<sup>スル</sup>アシテのゆと云<sup>スル</sup>アシテ  
主としのゆと云<sup>スル</sup>アシテのゆと云<sup>スル</sup>アシテ

三四八と云<sup>スル</sup>アシテのゆと云<sup>スル</sup>アシテ

主としのゆと云<sup>スル</sup>アシテのゆと云<sup>スル</sup>アシテ

三四八と云<sup>スル</sup>アシテのゆと云<sup>スル</sup>アシテ

三四八と云<sup>スル</sup>アシテのゆと云<sup>スル</sup>アシテ

主としのゆと云<sup>スル</sup>アシテのゆと云<sup>スル</sup>アシテ  
主としのゆと云<sup>スル</sup>アシテのゆと云<sup>スル</sup>アシテ  
主としのゆと云<sup>スル</sup>アシテのゆと云<sup>スル</sup>アシテ  
主としのゆと云<sup>スル</sup>アシテのゆと云<sup>スル</sup>アシテ  
主としのゆと云<sup>スル</sup>アシテのゆと云<sup>スル</sup>アシテ

とひかでときハ百千遍の義ハモリヒムト  
或事云郊ニハ山脈有ること巒と云ふ  
半あきへりてすら山脈有ること云ふ

六問云 鷲の巣を云ハ何を

答云レ野とりよかあひ

レ山脈の巣を云ふ事ありと/orレ  
山脈の巣と云ひて山脈に巣がある事  
は山脈の巣と云ふ事とちがひくゆえ  
山脈の巣のちがひを云ふ事と申す  
フシナリテ山脈の巣と云ふ事と云ふ事  
ヨリてゆる事のゆつてこの事と云ふ事  
一時も山脈にて山脈に巣がある事と云ふ事  
レ山脈に巣がある事と云ふ事と云ふ事  
ヨリ先づし山脈にて山脈に巣がある事故將作の  
浦ノアの方々云

是がふハ鷲の巣を云ひて云ふ事

主として山脈にて山脈に巣がある事

或人の筋より將作の事と云ふ事

と/or山脈にて山脈に巣がある事

將作ラヨリ紙スルシテシタニトウノ  
アリカツハシムヨリテアリルレリ或説  
本來モアリバリテアリルノ事ニシトス  
事モアリスモノシテモアリヤマニキ  
一トヒテ紀トシヘ大神主ノ風俗

七間云ミヤヒト云御ヘシテナリ也

答云ニシモヒハ媚トシモヤ経物物語スル  
ノリヘアリハシマシヒトシモリトシ

又世ツミモ書シテシタリヤワレヌサル  
ナシシテシヒトシアリハシマリトスル  
テヨリヨリ問云アリモヒハラタヒトス  
ナシヒトシハシマリトスルナシモ答云  
梅モウカヨリシテシタリシテナリ

又練歌ニ奇云

アリシヒトシアリシテシタリシテナリ  
ナシヒトシハシマリトスルナシモ答云  
ナシヒトシハシマリトスルナシモ答云  
トシモヒハラタヒトスルナシモ答云

やうのひくかよりとよかと阿達ハひく  
もあく文集もも圓の事ともひく  
ものともの圓蘿也とゆすやくもひく  
らる源氏の物語もゆくもひく

八問云 吉平よりてゆくとあるハ何を  
答云 云々象も龜甲の序トと云ふ事わざに  
都の民のものれきしてあれふと云  
てうそと云ふ事も又云ふやうと麻のれきす  
とやうと云ふ事も

此の時よりてはやくもひく

のねえれうつゆくから  
或説よひやくのまじめ廉のまじめ  
やまくれど云々と云ふ事もひく  
に都の

答云

多く山のむらへしゆくとひく

とひくちむれひくとひく

とひくひくひくひくひくひくひくひく  
めくめくめくめくめくめくめくめく

九問云 とひくひくひくひくひくひくひく  
ひくひくひくひくひくひくひくひく

答云 とひくひくひくひくひくひくひく  
ひくひくひくひくひくひくひくひく

兼若

ゆうすくも文の車れのあくと書云  
とくまきとひととくまきハ  
あまきわとくまきひと

十問云 ゆことくまきは

答云 或文云纏け事とゆこともし又纏障  
事もあり或物より目結ともすり古云  
ノリキのゆこともしもすり古云の  
わんりりともひのう経ア

ノリキの考案のはくまきのうちれ  
ノリキによもじと或物よりけり又  
色ハモヒタカヘトヤクシのゆことハ故將  
作の音ヨリもとくまきノリ

神ヨリタケイロウシトアリム

十問云 セリフノレーリの人と云古事と云  
后の事と云リと云も事のそれつゝ云を  
ナリトカヒテテサリ、ゆことセリのうと  
佛僧ヨリトヤモリ一寺のあくと之の或  
献芥ヨリ云其文のふくさヤハシキヨハシキと  
答云 ヨリと云あくと云

レノ太和國の猛者わのりりんとすひとつ  
ウリとウリのくらうとすひとすはくをもる  
ルアリ乃姫のこすのくらうのまくたんと  
シヒタウのクの池乃リモのよつてくと  
ツミリヒヒシ猛者のくさひあきあてわ  
シヒタウダスミのヨリハヤウリキシテ  
テ西シヒシマエテキのキトキカセのリキハ母  
あやーとてゆへとあがくらふとひりきハコ  
キトトシラフミテアラミヒトタネハ  
アハシラシラサトウリキリヨリヒヌ  
病シユウカヌアヒ時ヒ最ハ難解ナシキギヤ  
リモトモシラシキモトモシモリヤモセモト  
シヒタウヤシヒシモトモシモリヤモセモト  
ヤシヒシモトモシモリヤモセモトモシモ  
シヒシモトモシモリヤモセモトモシモ  
女房シヒシモリヤモセモトモシモリヤモ  
リヒシモリヤモセモトモシモリヤモセモ  
トモシヒシモリヤモセモトモシモリヤモ  
シヒシモリヤモセモトモシモリヤモセモ

うへりてうへんまぢかあはれうへし  
うへらひと一三百よきひりえひりくわ  
お母配えんとせらひをうへ行車もそくせま  
えんまゆりあくまんじゆく學問とく  
うへるは学問、うへる物とあくもくまゆりの内又  
うへるをひてうへるよくえくくくうへり  
うへりとれりうへりね又うへりものとく  
うへりのちうへりじあやへ心經大般若と  
うへりのせきうへりやうふりてうへるよく  
うへりのよくへりえくくうへりのよく  
讀泉讀泉、者  
うへりのよくへりのよくへりのよくへりのよく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
見とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
りとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
玉板樂とわりひりとくとくとくとくとくとく  
中子とくとくの中子中子、行基菩薩と導師導師  
讀讀、讀玉板玉板のうへりとくとくとくとくとくとくとくとく

とひりを亡者智光もうかと達生と  
と死ありまつらうまつ世引よ貧乏  
と惡道よゆんとどりハヨリ前便とく  
とくもうり人筆とらせとくとけり地の  
行基の化射行基ハ文殊とくとれハ智光  
りの智光れ先とては生とくとくのも是也  
是ハアだもあしと人の文殊法養引  
導仰とては僧正のまひりとて  
せりつとしのくのくのくとて  
くのくのくれにまひりとて

とひりと詠とくは争もみのく詠もみの  
とくもみのくひり

士問云 力すくはそのとくあくうへくよ  
答云 文選文賦云 心不耐煩而官事鞅掌  
又云 或清虛以婉約每除煩以去澁

弘仁格序云

鋪設 雜器功程多中等類事既輕辟侈等  
務從折中不煩上聞

煩惱兩字釋云

煩ハ 咳身 慢ハ 咳心

文集云

繚緐念女工之勞 費困之勤之苦  
心之悲憫也

法花經文云

生疲勞耶 是佛之勤也

罔也

大和物役不以爲苦之女郎云

人の勤めとてうきよとすとす  
又云あくとせきりとすのとす

火は燒き火燒ハ燭もの苦也

火は燒き火燒ハ燭もの苦也

三問云 人勤めとすとす  
答云或物の核木<sup>ハラキ</sup>とすとす又人勤め  
とすとすとすとすとすとすとすとすとすとす  
古奇云  
みとすとすとすとすとすとすとすとすとす

屋木<sup>ヤマキ</sup>核木<sup>ハラキ</sup>とすとすとすとすとす

とすとすとすとすとすとすとすとすとす

問云或說言和名云是紀生之子有其父之革  
革子也而里又云殺革子也者革子之殺也  
革子之死也而里也者革子也又云革子也  
革子也者革子也者革子也者革子也者  
革子也者革子也者革子也者革子也者  
革子也者革子也者革子也者革子也者

答云革子也者革子也者革子也者革子也  
革子也者革子也者革子也者革子也者

古問云革子也者革子也者革子也者革子也

答云革子也者革子也者革子也者革子也

人子也者革子也者革子也者革子也者革子也  
革子也者革子也者革子也者革子也者革子也

古答云

革子也者革子也者革子也者革子也者革子也

又曾用哥云

革子也者革子也者革子也者革子也者革子也

又曾用哥云革子也者革子也者革子也者革子也

立向云 まのめとひるぎの河  
もあ初とひるぎの酒井人をすくひき  
見て山里へゆく時の事云

いは人ちのうじとほの城  
のりそやくのうきよ

とくわくはく

答云 まのめとひるぎの河  
河の山内のかみとひるぎの酒井人をすくひき  
立向云 わくやくひきひき  
答云 まのめとひるぎの河  
ひるぎの山内のかみとひるぎの酒井人をすくひき  
立向云 まのめとひるぎの河  
かみとひるぎの酒井人をすくひき

わくや経文のよどりもくわくと取

ゆきはせむけのひきと車

と車ふ等とくすみの作はく神ふ清玉  
とくらの神玉のとくすみの作はく神ふ清玉

忠翁うえ也 同云車くらりとくすみの  
津ノめくすみの作はく神玉のとくすみの

はくすみの作はく神玉のとくすみの

答云わくの神玉ハ神代よりあくとくすみと

寄りけりくすみの作はく神玉のとくすみと

き生と夏神あくすみのあくとくすみと  
のうち久くくすみのあくとくすみと  
の謡ハ一束たてほの叶とくすみの作  
別の奇もくすみからきとくすみの作はく  
之くすみの夏神あくすみのうかんむぎと  
おとくとくすみのあくとくすみとくすみ  
うきはくすみとくすみとくすみとくすみ

答云くすみとくすみとくすみとくすみとくすみ  
くすみとくすみとくすみとくすみとくすみとくすみ

ひまくとくふいだれとくとくひまく  
神あむとく又屏風のすきとくお神あむ  
あむとくとくとくとくとくとくとくとく  
てあむとくとくとくとくとくとくとくとく

ひまくとくとくとくとくとくとくとくとく

ももとくとくとくとくとくとくとくとくとく

神あとわ

神あとわとわとわとわとわとわとわとわとわ

とわとわとわとわとわとわとわとわとわとわ

とわとわとわとわとわとわとわとわとわとわ

とわとわとわとわとわとわとわとわとわとわ

とわとわとわとわとわとわとわとわとわとわ

とわとわとわとわとわとわとわとわとわとわ

とわとわとわとわとわとわとわとわとわとわ

御子の事は御神體もあらずとてどもひて  
天王の命とてうそとてうらゆのまゝに  
ほまれやれりかとてきわひともすが  
もじりしもひきうと繕うひひけうと  
うじきくとくとけのとくらく平草と  
石山のとくとくとくとくとくとくと  
ち紙あげく懶優とくとくわいともす  
ひまふ又とてれ長鷗の鳥とほのせとくと  
ちきりと天王の外とまつめとくとくと  
くとくとくとくとくとくとくとくとくと  
わまくみるをけず天照大神之爲のわ  
せよるぬりくらわ内下りくがんす御坐らば  
よるのくらわのとくとくとくとくとくと  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくと  
くとくとくとくとくとくとくとくとくと  
くとくとくとくとくとくとくとくとくと  
あひえすやすてづる明白とくとのうき  
とてあひえすやすてづる明白とくとのうき  
とてあひえすやすてづる明白とくとのうき

さうりと紀の事と云ふ事と並んでその事と之  
又ある事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と之  
は流りゆめづらハシムテシテシテシテシテシテ  
紀伊國の日高の神アマツヒコノミコト  
ちうまくら生ハ多羅太神タラタケミコトと古語拾遺コクゴシテイ

卷之八

因乃まとてゆきとし又すかうのとあ  
もとをせしむれども、此のとよつてのとお  
をもとからして、のきハ馬をもとせし  
もとをもととあるとあるのとせつとく、十津の  
もとをもととあるとあるのとせつとくをせし  
大威三位身云

ト経はよきとよきとよきとよきとよ  
ト経はよきとよきとよきとよきとよ  
文賀歌女、長手、うよととほととほとと  
トとととととととととととととととととと  
ひととと十列とととと

向云、みのりとよきとよきとよきとよ  
あらとよきとよきとよきとよきとよ  
よひ、みそれ譽田のみそれとよきとよ  
のきのとよきのとよきのとよきのとよ  
よきのとよきのとよきのとよきのとよ  
けよ駿河のとよきのとよきのとよ  
とよきのとよきのとよきのとよきのとよ  
とよきのとよきのとよきのとよきのとよ  
のとよきのとよきのとよきのとよきのとよ

のまちにとどけりといひあひやあひをれ  
もくものまく今いよ駿馬とみをこまくよ  
まく的とよむくまくのきと車とまとよ  
とよむくとせゆとばとよとせゆと  
くとや十列のまくとよとせゆと  
答え、至一もくまくまくとよとせゆと  
列のまくとよとせゆとよとせゆと  
よとせゆと

大同云湯津内

答云

見記云とよとせゆとよとせゆと  
よとせゆとよとせゆとよとせゆと

圓すとよとせゆとよとせゆと哭溢のむわのゆけ  
一人の老翁老婆おじいとおじいとよとせゆと  
尊そととよとせゆとよとせゆとよとせゆと  
哭溢こゑあふとよとせゆとよとせゆと  
脚摩乳とよとせゆとよとせゆと  
めハ年摩乳とよとせゆとよとせゆと  
とよとせゆとよとせゆとよとせゆと  
大蛇のよとせゆとよとせゆとよとせゆ  
とよとせゆとよとせゆとよとせゆと  
とよとせゆとよとせゆとよとせゆと  
とよとせゆとよとせゆとよとせゆと  
とよとせゆとよとせゆとよとせゆと

とよとせゆとよとせゆとよとせゆと  
よとせゆとよとせゆとよとせゆと

井戸

おとえ母と一いは醤酒と釀酢麻八間といひ  
てそのへひどいのさうやのとまみて酒とりて  
あらすた地おちをうきの頭尾かしとくやめわね柄  
せきりとゆひてへ毎まい八谷やあひこも人ひと  
まうり酒さけとそくら酒さけとのへひどいへまう  
ゆひすかゆとくら酒さけのへひどいへまう  
ちとうれ酒さけとゆきと地ぢとくら酒さけのへまう  
尾おとくら酒さけとゆきと地ぢとくら酒さけのへまう  
えうす中なかひとうれ酒さけあらうまの神かみ酒さけと  
まうくま安せんとてとくら天あめ神かみ酒さけと  
中なか銀ぎんとくら天あめ雲くも酒さけとゆき地ぢ上うよ常じょうふ事こと  
氣きあらゆへけり後あと草くさ薙なぎ酒さけとくら倭武しづぶ  
を東征とうせいのと見み伊勢いせの神かみまももを酒さけりて  
まうりまよきの國くにと野の火びの酒さけよひて  
うの酒さけとまもとゆきとまもとゆきと今いま  
熱田社あつたのやしろよりもの更ますのとうの酒さけとくら天あめ酒さけ  
転ころと身みとた地ぢとくとゆきと今いまとまもと  
向むかえとまのやけりまくとまとはまくと  
まくとまくとまくとまくとまくとまくとまくと  
まくとまくとまくとまくとまくとまくとまくと

老翁もあらとまよひをもうう爲てま  
紀々とまよひがはらまよひのとどち  
くとゆのほまよひとえハ繫綱の義也  
湯山ひまく海川の御津ハ御の助也  
あまの御ひまくあつまくとつまくと  
基とあらとまよひとまよひとまよひと  
そのはまよひとまよひとまよひと  
けりとおとせま群行のとまよひとまよ  
ひとまよひとまよひとまよひとまよひ  
たまよひとまよひとまよひとまよひと  
御門右府の抄物よりとまよひとまよひと  
申さるをけり又湯津の義ハ古諸拾遺れ  
れりよかとけりとけりとけりとけりと  
きよけりとけりとけりとけりとけりと  
けりとあひとけりとけりとけりとけりと  
けりとよどりとけりとけりとけりとけりと  
けりとよどりとけりとけりとけりとけりと  
けりとよどりとけりとけりとけりとけりと

とものかくとくらむよのとれもあをひきで  
くらめとくらむせあらもあらは鬼くまとよ  
くらふとくらむとてむらめよまくとまする  
樂えれ義とくらもゆあら今わ世人の事云  
つうこれもくらめをあきるにひどく

ゆのつまゆくくくくくくく

毛ハみくのくはよまくとくらむの又早  
記よく湯津杖木とくらめ事とわ。

十九問云 謔諧歟。委趣如何

答云 漢書之謔諧者 滑稽也 翻不遠

史記滑稽傳芳物云滑稽酒器也

出曰成章詞不窮竭若滑稽之吐酒也

傳云

大史云天道恢々豈不大哉 談言微中亦可  
以解紛優孟多年常以談咲諷諫  
優旃善為咲言入於太道

淳于髡滑稽多矣

郭舍人發言陳辭雖不合天道然令人主悅  
是等滑稽大意也

詡謂の事いりとくよじく是よりてもかく

偏り戯言ともてのうかくも不實跡と云  
滑稽旨のとあるへ船道してちも成道す  
又船路ハ船玉道トコトもも達妙ノ義トモ  
アリシ故トニキト准滑稽の趣并況利口  
あらりの如言諾也以ひよひけども  
或ハ狂言トニシ妙義とあらヒト事ニ又  
アリシム頃トアラクレタマスノ

傳云

齊威王時楚發兵加齊至王使淳于髡之趙請  
兵齊金百斤車馬十髡仰天大咲王曰少之乎  
髡曰何敢王曰咲有說乎髡曰臣從東方來  
見道傍有禳田者操一豚蹄酒一盂而祝曰願棄滿筭  
汗邪滿車五穀蕃熟穰穰滿家臣見其取持者狹而  
無欲者奢故咲之於是王益齎黃金千鎰白璧半雙  
鵝鵠一束一束一束一束一束一束一束一束一束  
一束一束一束一束一束一束一束一束一束一束

是率心年也

齊主使淳于髡獻鵠於楚道蜚其鵠徒揭  
空籠造詣<sup>城肆</sup>往見楚王曰齊王使臣獻鵠過  
於冰上不忍鵠之渴出而飲之去我蜚已苦

鶻刺股而死恐人之議。吾以鳩獸之故，念士自傷  
殺者欲買而代之。是不信而欺君王。欲赴他國奔  
亡。痛告兩主使不逼故來服過受罪。太王楚王曰  
齊  
善王有信士若此哉。厚賜之財倍鶻在時也。

古今奇云

世事乃如人情之變也。可謂之

是矣。詞無說也

魏文侯時西門豹爲鄴令。豹到鄴會長老。問之。  
氏族疾苦。長老曰。苦為河伯娶婦。以致貧。豹問  
其故。對曰。鄴三老連操賦斂百姓。取其錢得數  
百萬。用其二三萬。爲河伯娶婦。與巫祝共分其  
餘錢。持帰。當其時。行視之家女好者。云是當爲河伯婦。郎競  
治齋宮。河上張緹絳帷。女居其中。行餚。共粉  
餚之。如嫁女牀席。令女居其上。浮之河中。行數  
十里。沒其人家。有好女者。以故多持女遠逃亡。  
以故无入。又困貧。豹曰。爲河伯送女。告之。吾亦往。  
送女皆諾。至其時。豹往會之。河上往觀者。其巫老女  
子也。從弟子女十人。來豹曰。呼。河伯婦來。視其  
好醜。女來。豹曰。是女不好。煩大巫嫗。爲入報河伯。

得更求好女後日送之即使吏卒抱大巫嫗投之河中。有頃曰巫何久也弟子趣之後以弟子一人投之河中允投三弟子豹曰巫嫗弟子是不能自三老為入是復投三老豹簪筆磬折嚮阿立待久豹顧曰巫嫗三老不來還欲復使廷掾入趣之皆叩頭破額色如死灰豹曰諾狀河伯留客之久若皆罷去歸後是以後不敢言河伯娶婦古今奇云

是等心利口也

酒

能

齊威王置酒召淳于髡賜之酒曰先生能飲幾何醉髡曰臣飲二斗亦醉能一石亦醉。王曰先生飲一斗而醉愚飲二石哉髡曰賜酒大主之前執法在旁御史在後髡恐懼俯伏而飲不過一斗徑醉矣日暮酒闌合樽坐男女同席杯盤狼藉堂上燭滅主人留髡而送客羅襦袴解微聞是鄉澤當山之時髡心最歡飲二石故曰酒極則亂樂極則悲萬事盡然言不可極之而襄以風諫焉王曰善乃罷長夜飲

古今子云

レリレリレリレリレリレ  
レリレリレリレリレリレ

是等詞利口也

始皇議欲大苑囿東至函谷關西至雍陳倉優  
旃曰善多縱禽獸於其中寇從東方來令驅鹿  
觸之是始皇以故輒止

古今子云

セキハツシタクシトムラニ  
シラノ人トムラニ

是等心狂也

優旃者秦倡侏儒也秦始皇之時置酒而天雨  
陛楯者沾寒ムカヒ海哀之曰汝欲休乎皆幸甚ハシマシ旃曰  
呼汝應旦諾有頃殿上モリ壽スミ旃臨檻大呼曰陛  
楯郎自諾旃曰汝雖長何益幸雨立我雖短  
固幸休居於是始皇使陛楯者ハサウエ半相代

古今子云

ミハツシタクシトムラニ  
シラノ人トムラニ

是等詞狂也

有りてのせよはるかに思ふて  
かへり年既利口に

とぞも

同云誄諸の趣如釋古今の地圖も  
誄諸のくひす手まへり

答云とれわひよリきのゆハ誄諸  
のゆわす手とはして少しへ彼都とを  
てゆゆるぬへまれハすゆまくあらひく  
しむ四季難部との繪  
狀ハ

二同云譬喻奇と六義の風比興等歌ふ事  
答云毛詩並萬象集よるての風比興等の譬  
喻の奇也たゞ一言のてくわすの故を義す  
別毛風ハ題とわらひとく物と假くひと  
えきひとく比ハ物と取くとくよる  
う假くせゆくと物と取てくとくよる  
越のくとけりとく又賦雅ハとくとく  
キテ難ハとくとくとくとくとくとくとく  
故六義の別之仍毛詩よ風雅頌と釋  
比興とく不釋大意やうとも乞うとくとく

の類亦義可也

二問云二十一家の歌と長音とるつり五七の  
音と短歌とるつり也

答云歌ハ中聲ハ韻字と用ひましニ二家  
音ハ中入之句の終字と為初韻又五句の終  
字と為終韻と取半ノ長音ハ中聲也  
トスオサセ音ハ中入二句の終字と為二韻半  
四句の終字と為三韻也此博く韻取半短少  
之音と短音とるつり也新撰式とるし新  
撰體體古今集より如斯存

問云ちうゆのく一歌の韻字と用ひたす  
百系よりのくハシモトモトウ新上古の濱成  
式とシテ百系集より二十一家ハ音と短音と  
ふづけふ七音と長音とるつり中古の古撰  
式とシテ新撰體體古今等よりみ七音と短  
音とるつり

答云濱成式云古長の求韻如錢<sup>一韵</sup>為新長の求  
韻如錢<sup>一韵</sup>古ハ二句と為今一句古ハ四句と為  
今二句古ハ二句と為一韵<sup>一韵</sup>如錢古ハ四句  
古ハ二句の濱成<sup>一韵</sup>ハ一韵<sup>一韵</sup>如錢古ハ四句

集の字を頭<sup>タメ</sup>に仍<sup>タメ</sup>の式とひす  
集の字を頭<sup>タメ</sup>に仍<sup>タメ</sup>の式とひす  
及<sup>シテ</sup>奇とひづら也

問云 あらばのをくへ 濱成の附よりみくへ  
の彼の流とそむきまくの韵とがくとうもと  
お撰の流とそむきまくの韵とがくとうもと  
ともくもすとわざめくと經<sup>キ</sup>奇とひづら也  
答云 みくへひあくへと自漢魏迄支那  
三變和歌何方代同牴<sup>アヒ</sup>りんや允諾事<sup>アヒ</sup>  
異非此一事<sup>ヨリ</sup>も解

問云 おとせ<sup>アヒ</sup>奇<sup>アヒ</sup>者もひだりをくへ おと<sup>アヒ</sup>の奇<sup>アヒ</sup>韵  
字と不<sup>アヒ</sup>く<sup>アヒ</sup>韵<sup>アヒ</sup>のくちとひく<sup>アヒ</sup>字  
答云 今奇<sup>アヒ</sup>韵<sup>アヒ</sup>字と不<sup>アヒ</sup>く<sup>アヒ</sup>とひく<sup>アヒ</sup>字  
とひく<sup>アヒ</sup>とひく<sup>アヒ</sup>とひく<sup>アヒ</sup>とひく<sup>アヒ</sup>とひく<sup>アヒ</sup>  
う<sup>アヒ</sup>せんや韵とひく<sup>アヒ</sup>とひく<sup>アヒ</sup>とひく<sup>アヒ</sup>とひく<sup>アヒ</sup>  
也<sup>アヒ</sup>問云 經<sup>キ</sup>奇<sup>アヒ</sup>はひづる<sup>アヒ</sup>字<sup>アヒ</sup>の奇<sup>アヒ</sup>ハシテ  
も讀<sup>アヒ</sup>ソ

答云 及<sup>シテ</sup>字の部<sup>ト</sup>或<sup>ハ</sup>く<sup>アヒ</sup>と或<sup>ハ</sup>く<sup>アヒ</sup>と或<sup>ハ</sup>く<sup>アヒ</sup>  
とある<sup>アヒ</sup>或<sup>ハ</sup>人<sup>アヒ</sup>文選<sup>スリ</sup>及<sup>シテ</sup>離騷<sup>ト</sup>とある<sup>アヒ</sup>  
原<sup>アヒ</sup>の離騷<sup>ト</sup>後<sup>アヒ</sup>人<sup>アヒ</sup>學<sup>スル</sup>之<sup>アヒ</sup>而<sup>アヒ</sup>作<sup>スル</sup>也<sup>アヒ</sup>事<sup>アヒ</sup>也

とくじゆるうゆへ又離鑑ともとよきは又す  
とよきへとく又人云又離鑑の扇原離鑑  
と色うみくとくか離すわりととく是と案  
えてみる奇とよき半一の離奇ハ不離離  
ゆ離奇也離奇とて離奇せ事と離奇  
ちきも離奇も離奇ゆあり又此離奇  
とよきとよきと離奇と離奇と離奇  
とよきとよきと離奇と離奇と離奇  
うちよあく離故人離奇の流也とよきひ  
まわらむと古今序遠素戔鳥尊  
到出雲國始有三年厚之離奇と作也  
八年如其ハ九年一寺奇と名奇と可離離  
三間院六句奇と達願奇と名め  
答云延願ハよするくとくとく奇ふうもあ  
るくとくとく成式のすと雙本とあつて  
延願はよくとくとくとくとくとくと  
古今序のすとくとくとくとくとくとくと  
くとくとくの義よやく  
問云前邊義づく 答云神代と奇の草  
句不寔じよきのそれも力ハ是の縁よりづく

三年不享奇也余之有之也亦不許之  
雖不識三年不享乃以之不以之也謂之不識  
六句之諺也一契參不謂熟以往者之奇駢也  
又曰之奇也之謂也之謂也之謂也之謂也  
之謂也之謂也之謂也之謂也之謂也之謂也

廿四問云混本奇と喜撰奇豫始おの式は後悔  
病奇と構半奇其なり

善文吉鈞不叶之冲人後悔病と難又之謂也  
之謂也之申よんも之謂も之謂も之謂も之謂も

混半奇と構半奇よんも之謂も之謂も之謂も  
之謂也又奇よんも之謂也之謂也之謂也之謂也  
之謂也之謂也之謂也之謂也之謂也之謂也

文選序云

至於今之作省異于古昔古詩之狀今則  
全取賦名

又舊家未且求教賦序云

賦古詩之流詩蓋志之所之歌又如楚辭奇  
古辭之流奇志之所之旋頭混本同古辭

流也

本云  
正和五年應鐘<sub>九</sub><sup>七</sup>以清輔朝臣自望下之  
本書寫定比校

慶安五<sub>壬辰</sub><sup>土</sup>曆  
五月吉日卯上村次郎右衛門板開

奧儀抄下終

正和五年應驗  
本書寫比較

慶安元年  
五月吉日  
上村次郎古衛門 执

契儀印

